

研究課題名：キリスト教布教と軍事技術の移転ならびに文化変容－先住民グアラニ  
とマオリを中心に－

研究目的

南太平洋<sup>1</sup>（英語では South Seas もしくは単数形の South Sea と表記）地域にヨーロッパ人の船舶が頻出し始めるのは 18 世紀後半のことである。数百年前のいわゆる「大航海時代」の最中にスペインとポルトガルが牽引した地球規模の探検・探索活動にイギリスやフランスが参入、同時期の南太平洋地域は両国がしのぎを削る舞台になっていた。こうした最中の 1769 年 10 月 6 日、ジェームズ・クック（James Cook 1728-1779）一行がニュージーランドに到達、翌年 4 月 20 日にはオーストラリアの東海岸に到着した。以後オーストラリアの東岸部ではイギリス人の入植が足早に進み、この動きを受けてニュージーランドの先住民マオリは強い好奇心に刺激されて同地を訪れるようになる。そしてマオリの文化・知的レベルの高さに触発されたキリスト教関係者の中から、ニュージーランドに趣いてマオリのキリスト教化を本格化させたいと願う者が出始めた。そうした人物の中で主導的な役割を果たしたのがサミュエル・マースデン（Samuel Marsden 1765-1838）である。シドニーを出発した彼はニュージーランド北島のランギホウア（Rangihoua）湾に 1814 年 1

2 月 22 日に到着、25 日のクリスマスには異世界からやって来た新参者たちを一目見ようと集ったマオリの一群に向けてミサを挙行した。これがニュージーランドにおけるキリスト教布教の始まりである。

この初期において布教を担ったのは教会宣教協会（Church Missionary Society, CMS）という団体である。これは元々イングランド国教会がアジア・アフリカ宣教を目的として 1799 年に設立した宣教団体である。その後、協会の活動は当時イギリス人が進出・入植を進めていた他地域にまで拡大され、程なくして南太平洋地域

---

<sup>1</sup> 赤道以南の太平洋南部地域を指す。

のニュージーランドも布教地に定められた。

マオリの改宗を進めるにあたり、宣教師たちの頭を悩ませたのが、彼らの関心をいかに惹きつけるのかという問題である。前述の通り、宣教師たちとの接触以前よりマオリはヨーロッパ人と既に交流しており、伝統文化や生活に存在しなかった様々な「文明の利器」を獲得して自らのステータスや権益拡大を目論む動きが顕著になっていた。そして利器の中でもマオリたちの関心を特に惹きつけたのがマスケット銃であった。ことにニュージーランド北島のベイ・オブ・アイランズ一帯で勢力を誇る首長のホンギ・ヒカ (Hongi Hika c. 1772-1828) のマスケット銃に対する関心は甚だしく、彼は CMS の宣教師トーマス・ケンダル (Thomas Kendall 1778-1832) と海を渡って 1820 年にイギリスに到着、国王ジョージ 4 世に謁見して大量のマスケット銃を獲得することに成功した。これによりホンギは敵対する周辺部族に壊滅的打撃を与え、政治・軍事的に圧倒的優位な立場に立った。そしてその見返りとしてホンギは、CMS の活動に惜しめない協力を与えたのである<sup>2</sup>。

ここで問題となるのが、いくら関心を惹きつけるためとはいえ、マスケット銃という武器をマオリたちが手にするのを助力する CMS 宣教師たちの行動をいかに理解するかということである。

時代と地域を違えて似た状況は、17-18 世紀のスペイン植民地期南米のラプラタ地域 (現在のパラグアイ南東部、アルゼンチン北東部、ブラジル南部、ウルグアイからなる領域) でイエズス会宣教師たちが行ったカトリック布教にも見出すことができる。同地の先住民グアラニに対してイエズス会士たちは、改宗事業の一環として、近世スペインで生み出され改良を重ねていた軍事技術・戦術を、布教区 (スペイン語でミシオン *misión* もしくはレドゥクシオン *reducción*) と呼ばれた改宗施設を舞台にグアラニに定期訓練していたのである。この目的は、当初はあくまでもグアラニの自衛におかれていたが、次第にラプラタ地域の防衛や布教区の領域拡大にもグアラニの軍事力が活用されるようになっていった。

私は大学院に入学して以来、20 年以上一貫してこのグアラニに対するイエズス会士のキリスト教布教の内実と、それがグアラニに及ぼした社会文化的インパクトの帰結を歴史学的に研究してきた。そうした最中の 2020 年 4 月、新型コロナウイルスが猛威を振るって外出すらままならない頃、偶然にも一冊の本と巡り会い、そこで前述の 19 世紀ニュージーランドにおけるキリスト教布教に関わる歴史を初めて知った<sup>3</sup>。読了後、この歴史には時代も地域も異なる植民地期南米ラプラタ地域で起きた出来事と重なり合う点が多いと感じ、「キリスト教布教と軍事技術の移転ならびに文化変容」という観点から、グアラニとマオリを比較することを思い立ったのである。

---

<sup>2</sup> Keith Sinclair, *A History of New Zealand* (Revised Edition), Hong Kong: Penguin Books, 1988, pp. 41-42 (Chapter I, Part II: Australian Colony).

<sup>3</sup> アルフレッド・W・クロスビー『ヨーロッパの帝国主義—生態学的視点から歴史を見る

ー』佐々木昭夫訳、筑摩書房、2017年。第10章において、19世紀ニュージーランドにおけるキリスト教布教の歴史が議論されている。

## 研究計画

2022年6月から7月にかけて種々の調査を行ったところ、ニュージーランドの首都ウェリントンに位置するヴィクトリア大学ウェリントン (Victoria University of Wellington) の社会文化研究学部 (School of Social and Cultural Studies) の宗教研究部門 (Study of Religion) にジェフリー・トラウトン<sup>4</sup> (Geoffrey Troughton) 准教授が専任教員として所属していることがわかった。トラウトン准教授の専門はニュージーランドにおけるキリスト教を軸に宗教全般を射程に入れた宗教史であり、インターネット上で公開されているプロフィールを見て、私とほぼ同世代の研究者であることがわかった。そこで電子メールを送信し研究計画を説明したところ、客員研究員として受入可能との返事を得た。これを受けて在外研究 (長期) を所属する政治経済学部に応募し、2022年9月下旬に教授会の承認を受け、準備を本格化させた。

2022年10月末から11月にかけてウェリントンを訪問し、トラウトン准教授と初めて面談することができた。その席で、キリスト教アナバプテストの教派であるメノー派 (メノナイト) の東南アジア (とりわけインドネシアにおける) での活動に詳しい同僚のフィリップ・ファウンテン<sup>5</sup> (Philip Fountain) 准教授を紹介され、ヴィクトリア大学図書館の所蔵文献の概要についても説明を受けた。

研究計画としては、在外研究を始めて数ヶ月から最初の1年はヴィクトリア大学図書館所蔵の文献を中心に読み込みを進め、次いで大学が位置するウェリントン市に点在する公立図書館所蔵の文献にも研究対象を広げていくことを考えた。そしてこの活動と並行して、ニュージーランド各地を訪れ、その地方特有の詳細な情報を扱う文献を多数所蔵する公立図書館での調査も考えた。

こうして刊行文献の調査を一通り終えた後は、次のステップとして、在外研究2年目には、未刊史資料の渉猟と分析を進めることを考えた。幸いにして、首都ウェリントンには国立図書館が存在したため、マイクロフィルム化された資料に容易にアクセス可能なことも、調査の過程でわかってきた。

このように、刊行・未刊行の関連文献を網羅的に把握・調査した上で、研究成果のとりまとめを行うことを考えた。

## 研究活動

2024度の開始と共に研究を本格的に始動させた。ヴィクトリア大学図書館はもちろん、相互貸借サービスを使って他大学が所蔵する文献にも幅広くアクセスし、研究に必要な種々の文献を取り寄せては読み込みを進め、重要箇所をメモしていった。さらにはニュージーランド国内各地を訪れ (北島では北から順にケリケリ、オーク

<sup>4</sup> <https://people.wgtn.ac.nz/geoff.troughton>

<sup>5</sup> <https://people.wgtn.ac.nz/philip.fountain>

ランド、ロトルア、タウランガ、タウポ、オタキなど。南島ではクライストチャーチ、ダニーデン、クイーンズタウン、アロータウン、カイコウラ、ブレナム、ネルソンなど)、地域ごとに特色ある公立図書館所蔵の文献を渉猟し、現存する教会やマオリの伝統的集会場(マラエ marae)を訪問することにも注力した。あわせて、隣国のオーストラリアにも足を運び、シドニーのニューサウスウェールズ州立図書館でも文献調査を行った。

在外研究 2 年目の 2025 年度に入ると、首都ウェリントンという地の利を活かして、同地所在の国立図書館をはじめ、クライストチャーチの中央公立図書館(Tūra nga)やニヤイタフ史料館(Ngāi Tahu Archive)、ダニーデンの中央公立図書館やオタゴ大学併設のホッケン図書館(Hocken Library)、オークランドのカトリック教区史料館(Auckland Catholic Diocesan Archives)などを訪れ、史料原本やマイクロフィルム化された未刊史資料の渉猟と分析に努めた。あわせてオーストラリアのメルボルンを訪れ、ビクトリア州立図書館での文献調査や、後述する学会で発表した。

## 研究成果

長年にわたる自身の研究において、17-18 世紀にキリスト教化した南米ラプラタ地域の先住民グアラニがスペイン起源の軍事技術や陣形をイエズス会士たちから伝授され、さながらヨーロッパの兵士のように各種戦闘に従事していたことは把握できていたが<sup>6</sup>、19 世紀ニュージーランドのマオリに同種の状況がどの程度まで起きていたのか、この点を明らかにすべく研究に取り組んだ結果、次の事柄が判明した。(1) ヨーロッパ人との接触を経てマオリにもたらされたマスケット銃は彼らの伝統的な戦闘様式を一変させ、肉弾戦から塹壕戦へという大きな変化が戦術に生じた。銃器の数や性能が戦局を左右するようになり、さながら鉄砲伝来に伴う戦国時代の日本で起きた戦術の大革命にも匹敵する状況が 19 世紀のニュージーランドで起きた。(2) マオリたちが用いた軍旗に十字架の文様がデザインされたり、聖書の一節が書かれた紙片を体に忍ばせておけば敵の銃弾に当たることはない、あるいはあたっても命を落とすことはないという「信仰」が生まれたり、銃弾に同様の紙片を詰めて発射することで相手に対する命中率が高まるという「神話」が生じたりするなど、キリスト教を受け入れることで戦闘を有利に導こうとするマオリが一定数存在したことがわかった。(3) 19 世紀前半から中頃にかけてニュージーランドに滞在したヨーロッパ人の中には、彼らとの接触以前のマオリが「一糸乱れぬ」特殊な隊列、マオリ語で kawau mārō と呼ばれる陣形を組んで武闘していたとの記録を残した者がいる。こうした戦術については、ヨーロッパでは古代ギリシア・ローマ時代から類似するものが時代ごとに改良されていき、16 世紀のスペインではテルシオ

(tercio) と総称される軍隊の陣形の組み方に関する理論が精緻化され、これを解

<sup>6</sup> イエズス会宣教師によってもたらされたキリスト教との接触と同時に進行したグアラニの武装化については次を参照。武田和久「17-18 世紀スペイン領南米ラプラタ地域のイエズス会布教区における銃器配備」『国際武器移転史』第 4 号、2017 年、63-88 頁。

説した種々の軍事教練書も、多くの図版が挿入され出版されていた。そして興味深いことに、南米のグアラニはイエズス会士からスペイン発祥のこうした陣形を作る教練を定期的に受けていたことが、現存史料を通じて裏付けられる。この場合グアラニは、彼らにとっては未知のヨーロッパ発祥の軍事文化を学ぶことで「一糸乱れぬ」戦闘隊列を会得したわけだが、19世紀のマオリの場合は、現存する文献情報から判断して、ヨーロッパ人との接触以前からこうした戦術を自分たちの文化の中で洗練させ実戦で披露していたことになる。しかし留意しなければならないのは、マオリの伝統的戦術に関する記録の多くはマスケット銃を主力とする戦術の大転換が起きた後にマオリの語りを通じて記録されたものであり、マスケット銃導入以前の戦術が美化されて文字化された可能性も考慮しなければならない。もちろんそうした語りのすべてが虚飾とは断定できないが、扱いには慎重さが必要である。

以上の研究を進める過程で、次の二点について、先行研究が皆無に等しいことがわかってきた。第一に、19世紀のニュージーランドにおいて CMS の宣教師がマオリにキリスト教を教導する際に用いたのが助教法 (monitorial system) と呼ばれる、産業革命期のイギリス発祥とされる教育メソッドだったが、助教法の二つの大きな特徴、すなわち、(1) 教師が有能な生徒を選別して彼らに教師の補助業務をさせる、

(2) 成績優秀な生徒には報償を与えて公の場で表彰する、この二つは何もイングランド国教会の宣教師である CMS や 18 世紀後半のイギリスだけに見られた特徴ではなく、それよりも数百年前も前に結成され、宗教教育の普及に力を注いだカトリックの修道会であるイエズス会が運営した学校や布教地においても実践されていたことである。この意味で、ある事柄にイギリス国教会的な特徴が認められる、あるいはカトリック的な要素が顕著であるなどの見解には検討の余地があり、宗派を超えた共通・類似要素を抽出して比較することの意義を検討しなければならない。こうした問題意識から、2024 年 11 月 27 日、ヴィクトリア大学社会文化研究学部が主催する研究セミナーにおいて、研究発表 Jesuit Catholic Missions in Colonial South America and CMS Anglican Missions in Early New Zealand: Beyond the Sectarian Boundary を行なった。

第二に、19 世紀の伝統的共同体におけるマオリの政治・社会的指導者の存在と役割を教会簿から明らかにしようとする研究の欠如である。教会簿とは、洗礼、婚姻、埋葬の三つの総称であり、カトリックの場合、洗礼簿には代父母 (godparent) の氏名が記載されるのが通例である。代父母とは、洗礼を受けた人物 (受洗者) の実の父母が他界するなど、不測の事態が生じた場合、実の父母に代わって受洗者を支える霊的父母、いわゆる保証人 (sponsor) のことである。私はグアラニ先住民に関して、この代父母の観点から研究を進めて成果を公にしたことがあり<sup>7</sup>、ニュージーランドで研究を進める中、この同じ方法論がマオリの研究にも応用できると考えるようになった。プロテスタント系のイングランド国教会が中心となってマオリのキ

---

<sup>7</sup> Kazuhisa Takeda, “Libros de bautismos y padrones en las misiones

jesuíticas del Paraguay (1754-1764): Propuesta para un análisis comparativo,”  
*Boletín Americanista*, vol. 88, 2024, pp. 135-159.

リスト教化が進められた歴史を持つニュージーランドでは、1812年にイギリスで布告された王令の影響もあり、洗礼簿が作成される際に代父母の氏名を記録する習慣は廃れ、在外研究の開始当初はこの観点からの研究は困難との見通しを持っていた。しかし在外2年目が始まって数ヶ月が経過した頃、ニュージーランドの南島の主要都市、クライストチャーチから車で1時間程度のバンクス半島のアカロアにおいて、フランス出身のカトリック修道会であるマリア会（マリスタ会）が1840年から対マオリ宣教に着手し、ラテン語で洗礼簿を残していたという情報を掴んだ。そしてこの記録は1869年まで続いており、タイプライターで打ち込まれた英訳版が存在することまでわかった。この事実を受けて、ウェリントンの国立図書館やクライストチャーチ中央公立図書館に出向いてアカロアのカトリック洗礼簿の分析に着手した。その結果、当該地域で政治・社会的に有力だったマオリの氏名が代父母として洗礼簿に繰り返し出てくることがわかり、こうした氏名を関連する他の史料や二次文献と照らし合わせることで、有力マオリの生涯や系譜を辿ることができた。こうした研究の成果については、まず2025年11月19日に、オーストラリアのビクトリア州、メルボルンに位置するラトロブ大学（La Trobe University）を会場として開催された国際学会 LASA/Oceania-Asia 2025 において、Catholic Church Records in Comparison: Akaroa, New Zealand (1840-1844) and Santa Rosa, Colonial Pa raguay (1754-1764) という題目の下、グアラニ先住民にまつわる洗礼簿の分析結果と比較するかたちで試験的に公表した。次いで2026年3月11日、この学会発表で得られたコメントを元に、研究対象期間を1844年から69年まで広げ、その成果をヴィクトリア大学社会文化研究学部が主催する研究セミナーにおいて発表した。発表題目は、Maori Godparents in Akaroa Catholic Baptismal Records (1840-1869): Tracing Political Figures and *Whakapapa* (Genealogy) である。

さらに研究発表とは別に、研究成果のアウトリーチとして、ヴィクトリア大学開講の授業で特別講義を二回行なった。第一回目は、前述のファウンテン准教授担当の Religions in Practice-RELI 342 という授業において、Popular Religion in Argentina, Spain, Japan, and New Zealand という題目の下で2026年2月26日に学生を対象に講義を行ない、四カ国の日常生活に見られる宗教にまつわる習慣や行事について説明した。第二回目は、ジェイナピーチャ・チェイヴァ＝イサラカル<sup>8</sup>（Janepicha Cheva-Isarakul）准教授とロレーナ・ギブソン<sup>9</sup>（Lorena Gibson）准教授が担当する Social and Cultural Research Methods-SACS 403 という授業において、Historical Research Depends on Sources, but What Types of Sources are Used? という題目で2026年3月24日に特別講義を行ない、私自身がこれまで行なってきた歴史研究の方法論について解説した。

<sup>8</sup> <https://people.wgtn.ac.nz/janepicha.cheva-isarakul>

<sup>9</sup> <https://people.wgtn.ac.nz/lorena.gibson>

## 今後の展望

前述の通り、在外研究 2 年目の 11 月にオーストラリア、メルボルンにおいて LA SA/Oceania-Asia 2025 が開催された。この国際学会は米国に本部を置く LASA (Latin American Studies Association) が主催した、ラテンアメリカ、オセアニア、アジアを横断・比較する初の地域部会である。開会式では、従来交流が少なかった地域が今後互いに連携・協力しながら共同研究を進めて行くことの潜在的意義の高さが強調された。私自身、大学院に入学以来かなりの年数ラテンアメリカの研究に従事してきたが、この度 2 年間にわたってニュージーランドで在外研究を実施し、こうした地域横断型の研究が今こそ求められているのだと強く実感した。ニュージーランドにいた最中、日本におけるラテンアメリカ研究のパイオニアであった故増田義郎先生（東京大学名誉教授）が、2004 年に『太平洋—開かれた海の歴史—』（集英社新書）を刊行していたことを知った。研究視座が地域横断的に日々拡大していく感覚を増田先生も同じように感じておられたのかと思うと、不思議な気持ちになったのと同時に、ラテンアメリカからオセアニアへの視野の拡大は自然な流れだったのかもしれないと感じた。

## 教育への効果等

この度のニュージーランドにおける在外研究を経て、様々な意味において自身の視野が広がり、幾つもの新たな知見が得られたのは紛れもない事実である。そしてオセアニアとラテンアメリカがどれだけ近いのか、生活を通じて幾度も実感した。研究拠点としたウェリントンの中心街テアロ (Te Aro) 地区の目抜き通りの名称はキューバ通りである。ここでは、ラテンアメリカ各地で目にする原色の強い色彩のペンキで色塗られた建物や、チェ・ゲバラの肖像画を模した絵を目にすることができる。市内にはエンパナーダ（肉や玉子などの具が入ったパン）を売る店やブラジル風焼き肉（シュラスコ）を提供する店もある。市内を歩けばスペイン語を耳にする機会もそれなりにある。同じことはオーストラリアのメルボルンでも経験した。メルボルンが位置するビクトリア州はラテンアメリカ出身の学生や研究者を州の政策として今日積極的に受け入れている。すなわちスペイン語圏の存在感と影響力は、スペインならびにその旧植民地にとどまらず、広域的に拡散しているのである。この広域性は、従来はアメリカ合衆国で拡大するヒスパニックの存在と影響力について声高に主張されてきたが、オセアニアにおいても類似する状況が現在起きている。

明治大学政治経済学部における私の主要担当科目はスペイン語だが、語学の授業でもこうした生身の体験を学生に伝えることで、「生きている言語」の今日を教授できるのではないかと考えている。またスペイン語とあわせて、政治経済学部では、講義科目である国際地域研究基礎論や国際文化特殊講義、演習形式の教養演習や専門演習をこれまで担当し、在外研究終了後も引き続き担当していく予定である。世界の諸地域を鳥瞰的視野から把握して共通性や類似性を理解することで養われて

いく物事の認識枠組みは、21 世紀を生きる私たち一人一人にとって欠かせないものである。欧米諸国だけを見つめ追い求める行為はすでに過去のものとなりつつある。これからはラテンアメリカとオセアニア、二つの地域における長期滞在経験を元に、世界の現状とこれからの未来について、学生と共に考えていきたい。